

# 1590年代の風刺詩と

## Donne の『風刺詩集』

久 野 幸 子

Satires of the 1590's & Donne's *Satyres*

Kuno, Sachiko

### I

英文学史上、エリザベス朝末期からスチュアート朝初期にかけては、現実的で風刺的な傾向が急速に強まった時期として知られている。確かに文学史をひもとくと、この時期に警句詩、風刺詩、<sup>フライティング</sup>論争詩、滑稽詩、風刺寓話から、<sup>キヤラクター</sup>人物スケッチ、散文パンフレット、風刺散文物語、<sup>コミカルサティア</sup>風刺喜劇に到るまで、風刺的な傾向を帯びた種々な作品がおびただしく発表されているのに気付かずにはいられない。ところで、これらの作品群の中にあつて、特に私達の興味をそそるのは、風刺詩、いわゆる“formal verse satire”が、1590年代、それも厳密にはその後半期に、殆ど爆発的と言えるような大流行をし、<sup>1</sup> 1599年6月1日付でキャンタベリー大司教とロンドン司教によって布告された出版禁止令を契機に、その大流行が一応下火となったという事実である。<sup>2</sup>

一方、後年、高名な説教者となった John Donne (1572—1631) は、詩人として優れた恋愛詩や宗教詩を書いたが、風刺詩 (satyre) も5篇残しており、それらは総て、現在のところ、1590年代に、詳しく言えば、1593年から8年頃までに執筆されたと推定されている。<sup>3</sup> つまり、Donne が風刺詩を書いた時期は、英国文壇で風刺詩が大流行した時期とほぼ重なっていた、ということになる。とすると、Donne の風刺詩5篇——これらは彼の死後1633年に、他の作品と共に出版された——は、同時代の風刺詩とどのような関係にあったのであろうか。

そこで、本稿では、まず、この風刺詩大流行の要因を検討し、次に、Donne を中心に、詩人達がどのような意図を持って風刺詩を書き、それらをどのように公表したのか、を探り、最後に、Donne の『風刺詩集』(*Satyres*) がこれらの風刺詩の中にあつて、どのような特徴を持っているのか、又、英国風刺詩史上、どのような意味を担っているのか、について若干考察してみたい。

## II

1590年代における風刺詩大流行の要因については、実は19世紀末からほぼ現在に到るまで、種々な説が発表され、論争が繰り返されてきた。その上、論争の途上で、「そもそも、この“formal verse satire”なるものはどう定義されるべきか」といった、窮めて本質的な議論まで生み出している。<sup>4</sup> しかしながら、ここで便宜上、あえてそれらの諸説を大別すると、次の三つの系列に分けられよう。第一の系列は、R. M. Alden がその労作 *The Rise of Formal Satire in England* (1899) の中で提示した、“humanistic zeal”説、即ち、エリザベス朝における古典文学移植の波が風刺詩のジャンルにも及んだとする〈文学的要因〉説に始まる。<sup>5</sup> 第二の系列を代表するのは、H. V. Routh が“London and the Development of Popular Literature, Character Writing, Satire, The Essay” (1909) 中に示唆した、当時の社会の政治的・宗教的・経済的な動向が、他の大衆文学と同様、風刺詩を流行させた、とする〈社会的要因〉説である。<sup>6</sup> 第三の系列には、G. B. Harrison が John Marston (1576—1634) の『悪徳の懲らしめ』(*Scourge of Villainy*) を1925年に編んだ時、その序論で主張した〈心理的要因〉説、即ち、当時の懐疑主義的で、ペシミスティックな風潮と風刺詩の大流行とが密接な関係にあるとする説、がまず、挙げられよう。<sup>7</sup> 勿論、これら三系列に属する諸説は、お互いを否定し合うものではない。ただ、どこを一番重要視するのか、という点で、微妙に食い違っているのである。

ところが、これらの説に対し、John Wilcox は1950年に“Informal Publication of the Late Sixteenth-Century Verse Satire”を発表し、その中で、当時の詩人達が風刺詩を書いたのは、宮廷登用の機会を<sup>つか</sup>握む為の自己宣伝であった、と詩人達の〈野心〉を特に強調した。Wilcox は、この頃“satiric mode”が流行していたこと、そして、16世紀の英国の学童達は、文法学校時代からローマ風刺詩にはよくなじんでいたので、<sup>8</sup> 詩人達が風刺詩を書く時になって、ローマ風刺詩を模範として思いついたことはごく当然なことであった、と他の要因を一応是認してはいるが、

An effective impulse to write satire is all that was needed to bring these possibilities to fruition.<sup>9</sup>

とし、この“An effective impulse”こそ、当時の、才能がありながら、門閥や財産に恵まれない、大学や法学院に在籍する若者達の宮廷への野心であった、と主張するのである。

Wilcox のこの論文は、約30年前に発表されたものであるが、現在でも、時々言及される。例えば、W. Milgate は Donne の風刺詩を編纂した際 (1967年出版)、その序論の脚注にこの論文名を挙げ、<sup>10</sup> 1981年に Donne の伝記を出版した John Carey は Wilcox の主張

をほぼ全面的に受け入れている。何故なら、Wilcox の次の仮説、

Between Gascoigne and Marston all verse satirists, except Lodge, whose satire was inconsequential, were ambitious young courtiers who probably neither felt nor reflected any serious discontent with the age . . . Fully developed and timely forms of satire, which Marston exploited, came from the four brilliant youths who wrote verse satire to attract the attention of the Court: Harington, Davies, Donne, and Hall.<sup>11</sup>

は、Donne やその頃の詩人達の風刺詩執筆の動機を説明する Carey によって、殆どそっくり、次のように繰返されているからである。

Virtually all the English satirists between Gascoigne and Marston were, like Donne, ambitious young men who deliberately gave their satires informal publication, by circulating them in manuscript, in order to bring themselves to notice. Their satirical verses did not reflect serious discontent with the age, but amounted to self-advertisement within the court group, of a kind necessary for those not born into wealthy or influential families.<sup>12</sup>

しかしながら、Wilcox のこの〈野心要因〉説には、実は種々な問題点が潜んでいると思われる。そもそも、彼の説は、当時の作品の公表形態と詩人達の伝記的事実に注目し、彼らの風刺詩執筆の意図を、いわば、外的状況から探ろうとするものであるが、成程、彼が論文の冒頭で前提としてあげる、この時期における作品の他に与える影響については、出版された月日ではなく、朗読されたり、あるいは原稿又は手書き写本での回覧が始まった時から検討すべきである、という主張は傾聴に値しよう。だが、個々の詩人をめぐる外的状況の捉え方には、少々疑問を抱かずにはいられない。例えば、Wilcox が取り上げた詩人達の詩が、Donne の詩を除いて殆ど総て、生前に出版されたという事実はどう説明するのであろうか。又、詩人達が、仮に、出版する前に彼らの風刺詩を写本の形で宮廷関係者の間に回覧させていたとしても、だからと言って、彼らの詩には、“serious discontent with the age” が反映されていない、とはっきり断定できるものであろうか。そこで、次章では、Wilcox の論文を手掛りに、当時の風刺詩人達をめぐる外的状況について、やや、具体的に検討してみたい。

### III

Wilcox は、当時の、宮廷登用を願う野心的な若者として、まず John Harington (1562—1612) をあげ、彼が Eton 校時代に軽い気持で書いた『警句集』(*Epigrams*, 出版は1614

年)が宮廷関係者の間で回覧され、彼に“wit”という評判をもたらしたとし、彼のこの宮廷での成功の、後続の者達への影響について、

In a would-be young courtier's eyes the merry laughter of groups in the Presence Chamber would give Harington's success an influence far more potent than any printed page of Martial or of Wyatt.<sup>13</sup>

と説明する。しかしながら、Harington は生まれた時から女王にかなり近い位置にあり、1591年に Ariosto の *Orlando Furioso* の英訳を女王への献辞をつけて出版し、1596年に Rabelais 風な風刺詩 *Metamorphosis of Ajax* を匿名で出版したが、結局、宮廷で任用されることはなかったという。従って、才人という評判を得たところまでは納得できるが、年齢的にも差のある Donne や Joseph Hall (1574—1656) や Marston にとって、宮廷での出世という点では、それ程魅力ある存在であったとは考えられない。

では、Wilcox が次にあげる Sir John Davies (1569—1626) の場合はどうか。彼も確かに警句詩を1590年代前半に書いたが、その大半が1595年に Christopher Marlowe (1564—1593) の Ovid の *Elegies* の英訳と共に出版されている。Wilcox は

After his epigrams brought him to the attention of the influential, he built a solid career on his legal ability.<sup>14</sup>

と説明するが、Davies は警句詩の他にも、*Orchestra* を1596年に、*Nosce Teipsum* は女王への献辞を付けて1599年に出版しており、後に彼を法曹界の要職に押し上げる契機となったものが、先に言及した1599年の出版禁止令で、実際に焚書となった警句詩の宮廷内での回覧であった、とは思われない。Davies の栄達にとって、彼の才人という評判がプラスに作用したという証拠はないである。

では、Hall の場合はどうであったのか。Wilcox は Hall が1594年にロンドンに、

... an apparent ambition to win advancement in the church, for which a place in even the outer reaches of the Court would be of use.<sup>15</sup>

を持ってやってきたと説明し、Hall の『鞭の収穫』(*Virgidemiarum*) は出版される前に1—2年間、写本の形で宮廷関係者の間で回覧されていたに違いない、と推論する。そして、その論拠として次の三つの事実、即ち、(1) Francis Meres (1565—1647) が1598年出版の *Palladis Tamia* の中で Hall を当時の風刺詩人の一人に数えていること、<sup>16</sup> (2) Hall の風刺詩は1599年の出版禁止令のリストに載っていること、(3) Hall の最初の出版物は匿名であったこと、を列挙している。

しかし、実は Hall の *Virgidemiarum* は執筆後まもなく出版されたらしく、<sup>17</sup> しかも *Virgidemiarum* は、1597年3月出版の最初の三巻は匿名であったが、1598年3月出版の最後の三巻は署名してあった。更に、Meres の本について言えば、Hall の最後の三巻出版から半年後に出版されているが、風刺詩の項に Hall の風刺詩は挙げられているのに、Wilcox によれば、同じように写本の形で宮廷内で回覧されていたはずである Donne の風刺詩についての言及はない。これらの事実は、Hall が決して、宮廷内での回覧のみを目指した訳ではない、いや、むしろ、始めから出版を考えていたらしいことを雄弁に物語っている。

では、Marston はどうなのか。弁護士の息子として生まれた彼は、1594年に Oxford 大学を卒業し、Middle Temple に入ったが、父の跡を継ぐつもりはなかったという。1598年に、一冊目は匿名で、二冊目は W. Kinsayder という筆名で出版した彼の二冊の風刺詩集は、Hall の風刺詩集と同様、ともに焚書リストに載せられ、Hall の詩集は猶予となったが、彼の詩集は二冊とも、三日後に実際に焚書に附されている。そこで、Wilcox も、

Suffice it to say that it is the first verse that was obviously written to reach the public as serious, castigating satire, first verse satire of the times not wholly the vehicle of youthful self-exhibition.<sup>18</sup>

と一応、“serious” な面を認めている。が、宮廷への姿勢を完全に否定した訳ではない。とすると、一般大衆を讀者と想定して書いた“castigating satire”が宮廷内で回し読まれ、それが、宮廷登用の糸口にもなり得たということなのであろうか。

以上、Donne を除いて、Wilcox に従って Harington から Marston までを検討してみた。結論としては、Harington, Davies あたりまでは、“wit” という評判が宮廷登用にプラスに働くとは仮定すれば、執筆の動機として〈野心〉説はある程度は是認できよう。だが、Hall や Marston となると、外的状況がかなり異なっており、この説は説得力を失うと思われる。

それでは、Wilcox は Donne については、どのように説明しているのであろうか。少々長いですが、次に引用してみよう。

Just a little later the career of John Donne was started apparently on Harington's pattern . . . . The satires of Horace and Juvenal and the elegies of Ovid were all familiar literary models from which he learned much, but no man was ever more ambitious than Donne, and the example of Harington as a successful courtier wit was still valid . . . . By the end of 1597 his attempts to gain attention brought him his start in public life, the appointment as Secretary to the Lord Keeper, Sir Thomas Egerton.<sup>19</sup>

確かに、Donne は風刺詩を原稿あるいは写本の形で回覧させたし、1597年末か8年始め、秘書職を得ている。しかし、だからと言って、風刺詩を〈野心〉の為に書き、それを回覧したことが切っ掛けで職を得た、と考えるのは、余りに短絡的に過ぎるのではないか。何故なら、Donne 以外の詩人達は、自ら進んでであったにしろ、あるいは不承不承であったにせよ、作品を出版している。だが、Donne は彼の警句詩や風刺詩を誰れにも献呈せず、出版もしていない。ところが、この1590年代にも、作品の献呈や出版によって官職を得ようとする道は、かつて程ではないにしても、相変わらず続いていたらしいからである。とすると、どうして Donne は出版せずに回覧を許したのか、又、回覧によって一体どの程度の読者を得ていたのであろうか。私達はこれらの点を詳しく調べて始めて、Donne の風刺詩執筆をめぐる外的状況について、正しい判断が下せるのではないか。そこで、次章では、Donne の出版への態度及び風刺詩執筆当時の読者について検討してみたい。

## IV

エリザベス朝についての実証的研究が進み、それに伴って、当時の出版事情や出版に対する人々の考え方の変遷が、次第に究明されている。例えば、元来、宮廷人及び宮廷関係者の間では、出版は余り名誉なこととは考えられなかったが、後半期になると、出版に対する抵抗感がかなり薄れていったらしい。この傾向は、印刷技術の進歩及び庇護者の経済力の低下と密接にかかわっていた、という。<sup>20</sup> すると、Donne の出版嫌いは、Edmund Gosse の指摘を待つまでもなく、<sup>21</sup> かなり珍しい、ということになる。尤も、Donne は常に出版を嫌ったという訳ではない。出版することを冒険的行為と述べたこともあったが、<sup>22</sup> 特に嫌ったのは〈詩〉を出版することであつたらしい。<sup>23</sup>

では、何故、Donne は〈詩〉の出版を嫌ったのであろうか。Donne と風刺詩の出版という問題については、度々、彼が友人 Sir Henry Wotton への書簡の中で漏らした次の言葉、

．．． to my satyrs there belongs some feare. . . .<sup>24</sup>

が引き合いに出されるが、この書簡は1600年に書かれたもので、1599年の出版禁止令以後のものである為、残念ながら、1590年代における Donne の気持を正確に伝えていることにはならない。しかしながら、出版禁止令が出されたということ自体、それまでも当局によって何らかの言論統制が行なわれていたことを示唆しており、風刺詩の出版には、風刺詩に本来備わる性質上、当然ながら、他のジャンルのもの以上に勇気を必要としたに違いない。従って、Donne が、風刺詩の出版を嫌ったという事実は、彼が後年、書簡詩の中で述べた、〈詩を出版することは、身をおと下すことになる〉という表向きの理由以外に、何か他の理由もあったことを、十分窺わせている。

それでは、次に、Donne の風刺詩の写本による回覧という問題を考えてみよう。彼の風刺詩やエレジーや初期の書簡詩が、他の作品よりは、より広く読まれたことは、周知の事実である。だが、初期の読者については、Alan MacColl が1972年に現存する写本の綿密な検討を行なって、その究明に努めたが、<sup>25</sup> 今尚、解明されていない。そこで、結局、現在のところでは、A. J. Smith の *John Donne, The Critical Heritage* (1975) 中の、次の叙述が、最も事実に近い、ということになろう。

But the scarcity of early manuscripts must mean that very few people could have read any of Donne's poems during the greater part of his poetic career. Indeed, the brief list of known readers confirms that Donne kept his verse close for they are almost all associates or correspondents of his: . . . <sup>26</sup>

ところで、上記の説明中の、ごく少数の友人や同輩は Donne の出版拒否の意向をしっかりと理解していたらしい。何故なら、当時、一旦原稿を手放してしまうと、作者の許可もないまま、出版されてしまうことが、度々あったからである。言い換えれば、Donne の場合、信頼できるごく限られた少数の友人達の間のみ回覧を許した、ということになる。となると、これが、即、Wilcox の主張する弾官運動となり得たであろうか。私にはそうは思えない。確かに、その選ばれた友人・同輩の中にたまたまエジャトン卿の息子や後にエセックス伯の秘書となる人がいたのではあったが、これらの関係はあまりに間接的である。

以上、Donne の風刺詩をめぐる外的状況について検討したが、要するに手書き写本の回覧を許したとしても、即、広く宮廷内で回覧された、ということにはならず、従って、〈野心〉を第一の動機として風刺詩を書いたということにはならない、と結論づけることが出来よう。勿論、Donne の生涯を眺めてみると、1601年に秘密結婚によって宮廷への足掛かりであった秘書職を失った彼は、以後、十数年間、浪人生活を送り、この間に、お世辞を並べた書簡を貴人に届け、献辞を付けて作品を出版し、美辞麗句を連ね、凝った文体で書簡詩を書いている。彼はこのような作品を書こうと思えば、書けたのである。だが、1590年代は、彼にとって、詩才のみを売物に世に認められなければならない、という切迫した時期ではなかった。野心がなかったというつもりはないが、風刺詩執筆の最大の意図が野心であった、とは考えられないのである。

## V

それでは、ここで再び振り出しに戻って、Donne が何故、風刺詩を書いたのか、を彼自身の言葉と、彼を取り巻く当時の文学的状況とに探してみたい。前章での検討が、風刺詩をめぐる外的状況についてであったのに対し、もっと内的なものを考えてみたいのである。

まず、Donne にとって〈詩〉を書くことは、一体、どのような意味を持っていたのであろうか。彼は自ら、詩論や文学論を著わすこともなく、他の文人達を批評したことも、殆どない。<sup>27</sup> ましてや、職業詩人になろうとしたことは一度もなかった。すると、それでいて、沢山の詩を書き残し、自らの詩を熱愛していたらしい、という事実は、どう説明できるだろうか。1590年代前半期の執筆と推定される、リンカン法学院時代の友人 Rowland Woodland への書簡詩中の、

But as a Lay Mans Genius doth controule  
Body and mind; the Muse beeing the Soules Soule  
Of Poëts, that methinks should ease our anguish,  
Although our bodyes wither and minds languish.<sup>28</sup>

あるいは、“Epithalamion at the Marriage of the Earl of Somerset” (1613) 中の

To know and feele all this, and not to have  
Words to expresse it, makes a man a grave  
Of his owne thoughts;<sup>29</sup>

等には、彼にとって〈詩〉を書くことが、一種の精神上の安全弁であったことが暗示されている。勿論、友人達に自らの詩才を認めてもらいたくもあった。だが、彼の中には、どうしても抑えきれない詩作への衝動が、まず第一にあったらしいのである。

では、〈詩〉の中でも、〈風刺詩〉を書くという点についてはどうか。この点については、Arnold Stein が1944年に“Donne and the Satiric Spirit”を発表し、Donne にとって、風刺的な傾向は彼自身の本質にかかわるものであった為、〈風刺精神〉が殆ど常に彼にとって創造への衝動であった、という説得力のある主張を展開している。<sup>30</sup> Donne 自身の言葉を探してみると、先にあげた同じ友人 Rowland Woodland への1596年頃執筆の書簡詩の中で、

and halfe quench'd by it  
Are Satirique fyres which urg'd me to have writt  
In skorne of all :<sup>31</sup>

と“Satirique fyres”が燃えていたことを打ち明けている。尤も、同じ Woodland への1597年頃の書簡詩中では、“Satyrique thornes”と呼んで、風刺詩を貶し、<sup>32</sup> 後年、説教の中でも、度々、風刺詩を非難している。<sup>33</sup> しかし、だからといって、彼の若い頃の〈風刺精神〉が本物ではなかった、と考える必要はあるまい。仮に、風刺詩を書くことが、ある意味では楽しみをもたらす気晴しであった、としても、である。



では、何故、Donne が〈風刺精神〉を持つに至ったのか。これは彼が1590年代に青年期を迎えたことと深く関係していよう。それでは、この1590年代とはどのような時代であったのか。王権と議会の対立が深刻化し、宗教問題が再熱し、不況と疫病と不作による飢餓が人々を襲い、社会全般に渡って幻滅感の充満した、不安と動揺の時期であったという。そこで、道徳的墮落と腐敗が各層に広まったが、中でも宮廷におけるそれらはすさまじく、官職及び利権をめぐる、金銭の授受が公然と行なわれ、派閥抗争が激化していたらしい。

ところで、このような社会の動向は、勿論、当時の文学にも大きく影響している。そこで、Daniel Javitch は、*Poetry and Courtliness in Renaissance England* (1978) の中で、この辺の動きを、文学の主流が、“courtly attitude” から “anti-courtly attitude” に替わった、と説明している。<sup>34</sup> 尤も、〈宮廷批判〉という主題に限れば、文学の主題としては非常に長い歴史を持ち、作品の書かれた時期によっては、額面通りに受け取れない場合もない訳ではない。だが、1590年代の〈宮廷批判〉に単なるポーズ以上のものが感じられるのは、前述した全社会的傾向という裏付けがあるからであろう。要するに、この16世紀最後の10年間は、まさに George Sampson が「理想主義は現実主義（写実主義）に席をゆずった」と表現する時代であった。<sup>35</sup> そこで、新しい世代の若い詩人達が、はっきりとした、現実主義的な〈風刺精神〉を持って、風刺詩という古くて新しいジャンルに取り組むことになった。Donne もその一人であった。これを否定する論拠は何もないのである。

## VI

それでは、この1590年代に詩人達はどのような風刺詩を書こうとしたのか。勿論、それまでの英国に風刺詩がなかったという訳ではない。しかし、H. S. Bennett が指摘するように、16世紀の後半期、英国中世文学が余り出版されなくなっている。<sup>36</sup> 風刺詩というジャンルについていえば、『農夫ピアズ』(*Piers Plowman*) によって代表される、寓意的で牧歌的な、いわゆる “English native tradition” が人々の共感を呼ばなくなったのである。そこで、彼らの生きたエリザベス朝末期とローマの紀元1世紀前後の時代との奇妙な類似性を嗅ぎとった詩人達が、ローマ風刺詩を手本に、自らの風刺詩を書くに至った。その結果、この時期の英国において、“formal verse satire under classical influence” が本格的に誕生することになったのである。尤も、この “formal verse satire” が、どの詩人によってまず書き始められたのか、という点については、現在も尚、多くの議論が残るところであるが、Donne もその先駆者達の一人であったことは間違いない。

では、Donne はローマ風刺詩を自らの風刺詩の中に、どのように取り入れたのであろうか。彼はもともと、単なる〈模倣〉やつまらぬ〈借用〉を嫌ってはいるが、<sup>37</sup> 作品の随所で、ローマ風刺詩を巧みに模範としている。そこで、Alden 以降、多くの学者によって、Donne の風刺詩と、ローマの風刺詩人達 —— Horace (65—8 B. C.) や Persius (34—62 A. D.)

や Juvenal (C. 60—130 A. D.) — の作品との詳細な比較研究が試みられている。だが、ここでは、当面の主題にとって必須とも思われないので、Milgate の次の説明を引用し、Donne はとにかく、“a sustained ‘imitation’”を行なったということで、先に議論を進めたい。

. . . here [in the *Satires*] for the first time in English is a sustained ‘imitation’ of a Latin genre, the consistent adoption of the techniques and tones of Roman satire.<sup>38</sup>

そこで、これ以後、暫時、ローマ風刺詩や英国中世風刺詩との関係を考慮しつつ、Donne の『風刺詩集』と当時の他の風刺詩集 — 特に Hall の *Virgidemiarum* と Marston の *Scourge of Villainy* — とを比較し、Donne の詩集の特徴を考察してみよう。

Donne の『風刺詩集』は、Heather Dubrew が次に指摘するように、

. . . stylistically they [*Satires*] exemplify satire of the 1590's. Their meter is harsh . . . , their imagery vivid and often coarse . . . , their tone forceful and strident . . . .<sup>39</sup>

であり、Donne の用いた語彙、韻律、語調、統語法等の多くが、当時にとって目新しくはあっても、彼の恋愛詩や宗教詩における程漸新で独創的という訳ではない。風刺詩という名称 ‘satyre’ の語源を ‘satyr’ と混同していた当時の人々と同様、Donne も又、風刺詩は “low style” で書くべきものと考えていたらしく、彼の風刺詩の文体は “rough” で “harsh” と評価されることが多い。一方、会話的直接表現、ローマ風な固有名詞の使用、“quasi-dramatic”，即ち、準劇的な場面設定（時として独白の形式をとる）、場面のスピーディで意表を突く展開等、総てローマ風刺詩にみられる特徴であり、かつ、1590年代の他の風刺詩の多くに認められるものである。勿論、Donne の風刺詩においては、より含蓄のある言葉が用いられ、論理の展開がより複雑なものとなっているが、目指すところにそれ程の隔たりがあるとも思われない。

ところが、主題に関しては多くの相違点が存在する。Donne が『風刺詩集』で扱った主題を大雑把に分類すれば、「Ⅰ番」上流社会、「Ⅱ番」詩人と弁護士、「Ⅲ番」宗教、「Ⅳ番」宮廷生活、「Ⅴ番」裁判官及び法廷となるが、相違点として第一に挙げたいのは、当時の多くの風刺詩人が、各々の詩集の中で、風刺詩弁護論を展開し、同時代の他の文人達を批判しているのに、Donne は殆どそれをやっていないという点である。成程、Donne は「Ⅱ番」ではソネット連作にふれ、へば詩人を非難し、「Ⅳ番」では風刺詩人の役割を説教者のそれと比較している。だが、その程度であって、例えば、Hall が一つの巻全部を文学時評にあて、「後記」で自作を弁護し、Marston が他の詩人達の多くを痛烈に罵倒しているのとは、全く異なってい

る。ローマ風刺詩においては、〈文学批評〉は重要な主題の一つであったから、この点では Donne は、ローマ風刺詩の影響から逸脱している。彼がこの主題を取り上げなかった理由については色々考えられるが、彼には風刺詩を出版する意図はなかったし、元来彼には〈詩〉や〈詩人〉を対社会的に余り高く評価しないところがあり、ここにもそういった彼の価値観があらわれている、とも言えよう。

主題における第二の相違点は、Donne の詩集では、全般に渡って、宮廷生活や宮廷人に言及しているところが特別に多い、という事実である。「Ⅰ番」「Ⅱ番」「Ⅴ番」でも言及されており、5 篇中一番長い「Ⅳ番」では、これらが中心主題である。だが、ローマ風刺詩においては、墮落した貴族階級として以外、あまり〈宮廷〉は大きな主題とはなっていない。この意味では、英国中世の風刺詩の主題は、〈宮廷〉と〈教会〉とであったから、<sup>40</sup> Donne はむしろ、英国風刺詩の流れに属することになる。一方、Hall や Marston は、宮廷生活や宮廷人を特別に扱わず、多くある風刺の標的の一つとして捉えているに過ぎない。では、何故、Donne がこれ程、宮廷人にこだわったのか。それは、この頃の彼にとって、宮廷が最大の関心事であったからに他ならない。

第三の相違点としては、Donne の詩集は宗教及び信仰の問題を大きく扱っている点を指摘したい。Hall や Marston も扱っていない訳ではないが、言及は少なく、しかもその扱いは常套的である。ところが、Donne の場合、そもそも彼の作品には殆ど常に世俗的要素と宗教的要素とが共存するが、この『風刺詩集』においても、随所に宗教的要素も認められ、かつ「Ⅲ番」では、宗教の問題だけが殊更、内省的に扱われている。勿論、このようなことは、道徳的次元を問題としたローマ風刺詩にはあり得ず、この意味でも又、Donne の風刺詩は英国中世風刺詩の伝統に属すると言えよう。だが、16世紀前半に行なわれた宗教改革以来、〈教会〉は英国風刺詩においては主要な主題ではなくなっていたから、Donne が英国国教会という国教の厳然と定まった社会にあって、この主題に取り組んでいる事実は、たとえ、その主張するところが、真の宗教を“doubt wisely” (l. 77) という、やや観念的な次元に留まっているにしても、十分注目に値しよう。この「Ⅲ番」は、Hall や Marston が Donne と全く同様、後で国教会牧師となったという伝記的事実を考え合わせると、Donne だけが Jesuit の家柄ではあったとは言え、当時の彼にとって、〈どの宗派を選ぶのか〉という問いが窮めて切実なものであったことを、明確に示しているのである。

第四の相違点としては、詩集全体に対する割合を考えた場合、法曹界の人々や法廷、裁判等について、やや大きな扱いをしている、という点を挙げたい。悪徳“lawyer”とその餌食となる“clients”という主題は、ローマ風刺詩にも英国中世風刺詩にもあり、Hall や Marston も当然、その主題の一つとしている。だが、Hall や Marston の扱いが、画一的で、迫力のない格言的表現や、動物寓話表現に終始しているのに比べ、Donne の場合、たとえば「Ⅱ番」で恋愛詩に法廷用語を乱用する“Coscus”を嘲笑しているように、やはり彼らしい個性的な表現となっているところが多い。尤も、秘書職についた彼がエジャトン卿に献ずる為に急いで

書き上げたと推定される「V番」は、その風刺態度に新しさがなく、ありふれた表現も多く、彼らしい個性にも欠ける為、他の四篇に比べ、質的に見劣りがする。全体として、Donne と〈法律〉との関係を考えて場合、法学院に在籍した彼には法律への関心はあったが、「IV番」に窺われる法律への不信感が暗示するように、それは必ずしも好ましい状態ではなかったようである。

以上、ごく簡単に Donne の『風刺詩集』の特徴を考察したが、全体を概観してみると、やはり度々指摘されるように、Horace 的な枠組の中に、Juvenal 的な描写を盛り込んだということになる。だが、Horace 的な“urbanity”と、Horace における“personal”で“reflective”な面、つまり Juvenal のように大衆に向かって叫ぶのではなく、友人に向かって静かに語りかけるといった面もある。主題にしても、ローマ風刺詩一辺倒では無論ない。このように Donne はローマ風刺詩の諸特徴を臨機応変に活用しているのである。

## VII

では、最後に、Donne の『風刺詩集』の英国風刺詩史上に占める位置について考察してみたい。

まず、文体的には、彼は自らに備わる言語能力を生かし、当時の社会を活写したが、二行連句という詩型にしる、凝った統語法にしる、粗雑で荒削りな文体という印象を抑えるまでには完成されていない。

ところが、主題という点では、注目すべきことが多い。まず、前章で指摘したとおり、彼の扱った主題は少ない。従って、選んだ主題其れ其れに深い洞察を施しはした。だが、書き上げた行数を考慮しても尚、ローマ風刺詩を英国に移植しようと、自ら“First English Satirist”と名乗り、考えられうるあらゆる悪徳や愚行に挑戦した Hall と比較すれば無論のこと、Marston や他の風刺詩人と比べても、Donne の扱った主題の範囲は、非常に限られた、偏ったものでしかなかったのである。そこで、風刺詩の社会的側面を重視する Hallett Smith は、彼の風刺詩に次のように低い評価しか与えていない。

But Donne's observation do not extend far into the fabric of contemporary society ; he is mainly concerned with city and court types, and the general impulse which motivated English satire in the native tradition was lacking in Donne. <sup>41</sup>

しかしながら、彼の主題が限られたものであったことは、一体、何を意味しているのか。彼にとって、風刺詩を書くことが、自らにとって身近でかつ重要な問題を論ずることであった、ということであろう。何故なら、彼の詩集は、読者に、詩人がローマ風刺詩の英国文壇への紹

介を目指している、あるいは、民衆の代弁者として社会を糾弾している、というより、詩人が自らの為に自らの問題を追求しているという印象をより強く与えるからである。この個性的でプライベートな印象を与えるという点について、Earl Miner は、

. . . although the satires are themselves in a form in which it is difficult to avoid writing public poetry, Donne succeeds in making them private.<sup>42</sup>

と説明したが、更に言えば、Donne は Alden が早くから指摘しているように、<sup>43</sup> 英国中世風刺詩のパブリックで集団的な面を捨て、ローマ風刺詩にみられる個性的でプライベートな面を取り入れた、ということになるろう。

さて、このように Donne の風刺詩をプライベートと捉えたと、ここで問題となるのが、各篇に登場する話者 “I” の存在である。近年、この “I” を 5 篇中ずっと一貫した性格をもつ人物と考え、全篇を一つのまとまりをもつものとして扱う読み方が増えているが、私としては、ここでは各篇中の “I” が、非常に矛盾する、多面的で複雑な性格を持つ人物として描かれている、という点を強調したい。この意味で、Donne の描く “I” は、英国中世風刺詩に登場する “simple, plain-dealer” でもなく、Marston の描く、強烈な個性を持った “malcontent” でもない。ローマ風刺詩人の描く其れ其れの登場人物ともどこか違う。この “I” なる人物は、よく言えば複雑、悪く言えば、窮めて曖昧な面を持っており、それは、2, 3 例を示せば、「I 番」で自ら書齋に残りたいと言いながら、書齋を “prison” (l. 4) と表現しているところ、「IV 番」で、宮廷に自分から出向き、それを罪と自責し、風刺詩の中で風刺詩人の限界を語るどころ、等に窺われよう。Emory Elliott はこれを “the dilemma of Christian humanist” と説明しているが、<sup>44</sup> この説明の正誤はともかく、この多面的で複雑な個性は、ローマ風刺詩の特徴を、Donne が一層内面的に深く掘り下げた結果、でき上がったものと言えよう。

ところで、この〈内面的に深く掘り下げる〉ということは、勿論、“I” が詩人自身に近付くということではない。どこまでいっても、“I” は詩人自身と同一人物ではあり得ない。だが、Donne のこの詩集には、時折、ある程度の、という条件付きではあるが、詩人の “I” へのコミットメントが感じられるのも事実である。勿論、この中での 〈宮廷批判〉を Jonathan Swift (1667—1745) が *Gulliver's Travels* 第四巻で皮肉る、国王に認められたい為にわざと宮廷の腐敗を公開の席上で激しく非難するといった姿勢、<sup>45</sup> とのみ考えると、これは Wilcox の説に通じることになるろう。しかし、優れた風刺詩とは、本来、機知と真面目な批判との微妙な均衡の上に成り立つものであるから、不正や悪行への真摯な憤りの感情を欠く優れた風刺詩など、実は存在し得ないのではないか。

英国風刺詩への貢献という観点から Donne と Hall と Marston を比較すると、当時と

しては、Hall や Marston に軍配が上らう。出版された彼らの詩集は多くの読者に読まれ、又、それらが直接の刺激となって、更に多くの風刺詩集を誕生させたからである。しかし、Hall や Marston の詩集には、Donne の詩集に時々感じられる〈苦惱する自我〉はそれ程十分に描き出されているとは思えない。Donne にとって、宮廷、いや、既成の社会体制との関係が、彼が後に宗教詩“A Litanie” (1608) の中で、“ . . . , to some/Not to be Martyrs, is a martyrdom”<sup>46</sup> と述べるような逆説によってしか切り抜けることの出来ない難問であつたとすれば、彼が風刺詩を書きながら、出版せず、それでいて友人間に回覧を許した理由も、結局、ここにあつたのではないか。ともあれ、Donne が英国に伝わる明快だがやや単調な風刺詩を、ローマ風刺詩を手本あるいは出発点として、深い感情を盛り込み得る、複雑で、かつ緊密な構成をもった新しい風刺詩に生まれかわらせたという点こそ、後世、John Dryden (1631—1700) や Alexander Pope (1688—1744) によって、彼の『風刺詩集』が窮めて高い評価を与えられた所似なのであろう。<sup>47</sup>

## 注

1. 当時出版された作品には、Joseph Hall の *Virgidemiarum* (1597, 1598), John Marston の *The Metamorphosis of Pigmalion's Image and Certaine Satyres* (1598) と *The Scourge of Villainy* (1598), Everald Guilpin の *Skialetheia* (1598), William Rankins の *Seven Satyres* (1599), Thomas Middleton の *Micro-cynicon, Six Snarling Satyres* (1599) 等がある。
2. 出版禁止令の内容は次のようなものであった。  
“(1) that no Satyrs or Epigrams be printed hereafter, (2) that no English histories be printed except those allowed by the Council, (3) that no plays be printed except as allowed by authority, (4) that all Dr. Harvey's books be taken wheresoever found, etc., (5) that all books similar to those above stated shall not be printed until the master or wardens of the Stationers Company have ascertained that the signature of the licenser is genuine.”  
Frederick Seaton Siebert, *Freedom of the Press in England, 1476-1776* (U. of Illinois P., 1952) 63より引用。
3. Donne の風刺詩の執筆時期については、J. C. Grierson ed., *The Poems of John Donne*, 2 vols (Oxford U. P., 1912) II, 100-5, 及び W. Milgate ed., *The Satires, Epigrams and Verse Letters* (Oxford, at the Uarendan P., 1967) の各篇の注部分による。
4. Milgate は“The great defect of so-called formal satire is that it is not a form at all, but a mode of approach, . . . ” (*Ibid.*, xxiii-xxiv) と言っているが、この問題については、Mary Claire Randolph の“The Structural Design of the Formal Verse Satire” (*PQ*, 21, 1942, 368-84) が重要である。
5. R. M. Alden, *The Rise of Formal Satire in England Under Classical Influence* (Philadelphia, 1899, reprinted 1962) 1-4.
6. *The Cambridge History of English Literature* (Cambridge U. P., first ed. 1909, reprinted 1949) Vol. 14, 316-363.
7. The Bodley Head Quarto (London, 1925) vii-xi.
8. この点については、T. W. Baldwin, *William Shakespeare's Small Latine and Lesse*

- Greeke*, 2 vols (U. of Illinois P., 1944) II, 497-548 に詳しい。
9. John Wilcox, "Informal Publication of the Late Sixteenth-Century Verse Satire," *HLQ* 13 (1950, 191-200) 194.
  10. Milgate, *op. cit.*, xxi.
  11. Wilcox, *op. cit.*, 200.
  12. John Carey, *John Donne, Life, Mind & Art* (Faber & Faber, 1981) 63.
  13. Wilcox, *op. cit.*, 196.
  14. *Ibid.*, 197.
  15. *Ibid.*, 198.
  16. Francis Meres, "From *Palladis Tamia* 1598," *Elizabethan Critical Essays*, ed. by George Smith, 2 vols (Oxford U. P., 1904) II, 312 に次のように風刺詩人が列挙されている。  
 ". . . our Satirists Hall, the Author of *Pigmalion's Image and Certain Satyres*, Rankins, and such others . . ."
  17. Arnold Davenport ed., *The Poems of Joseph Hall* (Liverpool U. P., 1969) xvii.
  18. Wilcox, *op. cit.*, 199.
  19. *Ibid.*, 197-8.
  20. J.W. Saunders, "The Stigma of Print", *EIC* (1951) 139-164.
  21. Edmund Gosse, *The Life and Letters of John Donne*, 2 vols (Peter Smith, 1959) I, 77.
  22. G.R. Potter and E.M. Simpson eds., *The Sermons of John Donne* (U. of California P., 1953-62) IV, 264.
  23. Gosse, *op. cit.*, 303-4.
  24. E. M. Simpson, *The Prose Works of John Donne* (Oxford U. P., 1924, rev., 1948) 316.
  25. Alan MacColl, "The Circulation of Donne's Poems in Manuscript," *John Donne, Essays in Celebration* (Methuen & Co LTD., 1972) 28-46.
  26. A. J. Smith ed., *John Donne, The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1975) 4.
  27. 1603-11年頃の作とされる *Catalogus Librorum Aulicorum* では, Donne は珍しく同時代人達に言及している。(Simpson, *op. cit.*, 157参照)
  28. Milgate, *op. cit.*, 63.
  29. W. Milgate ed., *Epithalamions, Anniversaries and Epicedes* (Oxford U. P., 1978) 13.
  30. Arnold Stein, "Donne and the Satiric Spirit," *ELH* (1944) 266-282.
  31. Milgate, *The Satires*, 66.
  32. *Ibid.*, 69.
  33. *Sermons*, I, 179, VI, 408.
  34. Daniel Javitch, *Poetry and Courtliness in Renaissance England* (Princeton U.P., 1978), 119-132.
  35. George Sampson 著, 平井正穂監訳『ケンブリッジ版イギリス文学史, I』(研究社, 1976) 241.
  36. H. S. Bennett, *English Books & Readers, 1558-1603* (Cambridge, U. P., 1965) 250.
  37. Donne は "The Progresse of the Soule" の Epistle で "Now when I beginne this booke, I have no purpose to come into any mans debt; . . . if I doe borrow any-

- thing of Antiquitie, besides that I make account that I pay it to posterity, with as much and as good: You shall still finde mee to acknowledge it, and to thanke not him onely that hath digg'd out treasure for mee, but that hath lighted mee a candle to the place." (Milgate *op. cit.*, 26) と言っている。
38. Milgate, *op. cit.*, xvii.
  39. Heather Dubrow, "No man is an island" : Donne's Satires and Satiric Traditions', *SEL* 19 (1979, 71-83) 76.
  40. K. W. Gransden, *Tudor Verse Satire* (Athlone Press, 1970) 13.
  41. Hallett Smith, *Elizabethan Poetry* (Harvard U. P., 1952) 226-7.
  42. Earl Miner, *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley* (Princeton U. P., 1969) 10.
  43. Alden, *op. cit.*, 44-51.
  44. Emory Elliott, "The Narrative and Allusive Unity of Donne's *Satyres*", *JEGP* (1976) 105-16, 110.
  45. Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (A Norton Critical Edition, 1970) 222.
  46. Helen Gardner ed., *John Donne, The Divine Poems* (Oxford at the Clarendon P., 1952) 20.
  47. A. J. Smith, *op. cit.*, 149-50, 178-80参照。

参 考 文 献

1. Biography
  - Bald, R. C., *John Donne: A Life*, Oxford U. P., 1970.
  - Carey, John, *John Donne: Life, Mind & Art*, Faber & Faber, 1981.
  - Gosse, Edmund, *The Life and Letters of John Donne*, Peter Smith, 1959.
  - Dictionary of National Biography* [DNB] London, Smith, 1908-1909, 22 vols.
2. Editions of Donne's Work
  - Epithalamions, Anniversaries and Epicedes*, ed. by W. Milgate, Oxford U. P., 1978.
  - Divine Poems*, ed. by Helen Gardner, Oxford at the Clarendon P., 1952.
  - Poems*, ed. by H. J. C. Grierson, Oxford U.P., 1912.
  - Satires, Epigrams and Verse Letters*, ed. by W. Milgate, Oxford U. P., 1967.
  - Sermons*, eds. by G. R. Potter and E.M. Simpson, U. of California P., 1953-62.
3. Editions of Others' Work
  - The Poems of Joseph Hall*, ed. by Arnold Davenport, Liverpool U. P., 1969.
  - The Poems of John Marston*, ed. by Arnold Davenport, Liverpool U. P., 1961.
  - John Marston, *Scourge of Villainy*, ed. by G. B. Harrison, The Bodley Head Quarto. 1925.
  - Francis Meres, "From *Palladis Tamia*, 1598," *Elizabethan Critical Essays*, Oxford U. P., 1904. 308-324.
  - Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, A Norton Critical Edition, 1970.
4. Critical Studies
  - Alden, R. M., *The Rise of Formal Satire in England under Classical Influence*, Philadelphia, 1899, reprinted 1962.
  - Dubrow, Heather, "No man is an island": Donne's Satires and Satiric Traditions,' *SEL* 19 (1979), 71-83.



- Elliott, Emory, "The Narrative and Allusive Unity of Donne's *Satyres*", *JEGP* (1976), 105-16.
- Gransden, K. W., *Tudor Verse Satire*, U. of London P., 1970.
- Javitch, Daniel, *Poetry and Courtliness in Renaissance England*, Princeton U. P., 1978.
- Jonas, Lean, *The Divine Science*, Columbia U.P., 1940, reprinted 1973.
- Kernan, Alvin, *The Cankered Muse*, Archon Books, 1959.
- MacColl, Alan, "The Circulation of Donne's Poems in Manuscript," *John Donne, Essays in Celebration*, Methuen & Co LTD., 1972, 28-46.
- Miner, Earl, *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*, Princeton U. P., 1969.
- Randolph, Mary, Claire, "The Structural Design of Formal Verse Satire," *PQ* 21 (1942), 368-384.
- Routh, H. V., "London and the Development of Popular Literature, Character Writing, Satire, The Essay," *The Cambridge History of English Literature*, Cambridge U. P., 1909, reprinted 1949, Vol. 14, 316-363.
- Simpson, E. M., *A Study of the Prose Works of John Donne*, Oxford U. P., 1924, reprinted 1948.
- Smith, A. J., ed., *John Donne, The Critical Heritage*, Routledge & Kegan Paul, 1975.
- Smith, Hallett, *Elizabethan Poetry*, Harvard U. P., 1952.
- Stein, Arnold, "Donne and the Satiric Spirit," *ELH* (1944), 266-282.
- Wilcox, John, "Informal Publication of the Late Sixteenth-Century Verse Satire," *HLQ* 13 (1950) 191-200.
- 
- サンブソン, ジョージ著, 平井正穂監訳『ケンブリッジ版イギリス文学史 I』研究社, 1976.
5. その他
- Baldwin, T. W., *Shakespeare's Small Latine & Lesse Greeke*, 2 vols, U. of Illinois P., 1944.
- Bennet, H. S., *English Books & Readers, 1558-1603*, Cambridge U.P., 1970.
- Saunders, J. W., "The Stigma of Print," *ELC* (1951), 139-164.
- Siebert, Frederick Seaton, *Freedom of Press in England, 1476-1776*, U. of Illinois P., 1952.